

アラカルト

被害者感情・犯罪者処遇

「少年犯罪被害当事者の会」（武るり子代表）の少年犯罪などについて話し合う集会「WILL（ウィル）」が、過日、大阪市内で開かれた。これを報道したN新聞では「埼玉県で一九九五年八月、少年五人に暴行を受け死亡した高校一年生（当時十五歳）の姉は『警察に捕まったことを勲章にする少年がいるが、少年でも一線を越えればただの犯罪者』と怒りをあらわにした」と伝えている。

加害者が誰であれ、凶悪犯罪の被害者の気持ちはまことに無念極まりない。それがとりわけ、加害者が未成年者の場合には、さらに増す。ただでさえ加害者に対する被害者感情が軽視される司法手続きの中、未成年だからだという理由で、即ち保護の対象・責任能力の未熟といった論理から、加害者（少年）に対する刑事罰が省かれたり、不当に低い量刑が与えられるからである。こうした状況はまた、加害者が精神障害者の場合にも、ほとんど同様に当てはまる。心神喪失あるいは心神耗弱といった加害者の責任能力の欠如から、加害者は刑事罰を免除され、被害者側はひたすら泣き寝入りするほかないのである。

数年前、乗用車運転中の娘が未成年者運転のトラックに追突され、一歩間違えば生死にも

関わる車両大破の事故にあった。が、相手方保険会社と弁護士は、当該車両と同種同格の中古車を購入することも叶わぬ低額の賠償金を提示し、ご不満なら裁判でもどうぞ、と言うだけできとりつく島もない。初めは頭を下げていた加害者もやがて私たちに罵声さえ浴びせてくるようになった。警察の事件処理を調べたところ、驚いたことに、あつと言う間に不起訴処分が終わっていた。これが相手側の態度をいつそう不遜にした大きな要因でもあつたらう。被害者が突き放される状況の中で、致し方なく当方も弁護士に依頼し相応の賠償金を取り立てるに及んだが、その間一年余り、加害者側と司法のあり方に対する不条理感は実に耐えがたいものであつた。たかが交通事故被害であつても、そこからもたらされる怒りと無力感を経験した者でなくては容易に判らぬ。ならば、刑事罰が回避される少年や精神障害者の加害によつて重大な被害を受けた被害者及び被害者遺族の思いはいかばかりであろうか。大学を出てしばらく、家庭裁判所で家裁調査官職に就いていたときの話である。少年に甘い交通判事がいた。一般道路で時速六十km超過しようと、全治三ヶ月の人身事故を起こそうと、家裁は教育・保護機関であるとして、よほどのことがない限り訓戒不処分に付していた。それが突然、厳罰主義に変わった。噂では、身内が少年加害による重大な交通被害を受けたから、ということであつた。

この噂話から私は今に及ぶいろいろのことを学んだが、これに前述の交通被害体験、長い臨床体験を加えて、当面の主題に関しては、四つの見解をもつに至っている。被害者感情

が充分に尊重されることは犯罪者処遇の第一の基本である。罪を犯した者に応分の刑罰を課することは第一義的に当然である。未熟・未発達なる者に対してひたすら罰を避け治療行為に走ることは極めて反教育的である。司法は決して恣意のままに行われてはならない。

これらから敷衍して、将来における重犯罪者の処遇に関し、提言がある。

「少年であろうと精神障害者であろうと、裁判（または審判）では原則として刑事処分が優先され、それに加えて、精神発達と精神障害の程度に応じ、最もふさわしい教育・治療が付与される。減刑は被害者側が許容しない限り行われない」

（二〇〇二年八月）

医療事故死に思う

九月から十月にかけて、医療事故死の報道が相次いだ。東京大学付属病院の輸血時空気血管注入事故、関西地方某病院の輸血時エルシニアン菌混入事故、慈恵会医大青戸病院の前立腺癌腹腔鏡手術事故等々。どれもみな、些細にしてかつ重大な不注意・過誤、あるいは生体実験的無謀手術によって引き起こされている。医療行為にミスや失敗はつきものとはいえ、昨今マスコミで報道される医療事故の多さ大きさは、ただごとではない。医療従事者たちの心の中に、何か尋常ならざるものが欠落している証左であろう。

三〇年ほど前、湯たんぼで低温火傷を負った娘を近くのK医科大学付属病院に連れていった時の出来事である。

それは、当時の私よりいくつか若いまだ三〇半ばの、やせぎすの男性医師だった。「ウエノ講師、ウエノ講師」と看護婦たちは呼んでいた。彼は、チューインガムを噛み噛み、看護婦たちに冗談を言いながら、いかにも手だれのような無造作な手さばきで、幼気な娘の左足中脛にメスを入れ、そしてあつという間に、紅い真皮領域を大きく楕円形状に切り開き、切り除いてしまった。

事前に何の説明もなく、患部に塗り薬を貼るぐらいだと思っていた私は異様な進展に思わず声を上げた。

「これは、どういう治療ですか」

医師は私の方に顔を向けるでもなく、相変わらずチューインガムを噛みながら、いとも当然のように、

「植皮します」と、素気なく言った。

今でも悔やむ。治療室とは上下に大きな隙間のある仕切壁で仕切られただけの待合室で待つ間、前の女性患者がその医師にか細く切ない声で抵抗する様が、聞こえていた。

「植皮はしたくありません」

「もう切っちゃったんだから、表皮は出てこない。植皮しないと、痕がケロイド状になるけ

ど、いいですか」

このやり取りの後、うなじの当たりが患部なのだろうか、首にぐるぐる巻いた包帯の上からそこをいとおしむように手で押さえながら、二十前後の若い女性が悄然とした様で治療室から戻ってきた。

この出来事が咄嗟に思われ、この患者と私の娘が、患者を利用して技術を磨こうとする悪魔的行為の実験台にされたことに即座に気付いた。メスを用いらせる前に、その治療行為を質しておくべきだったと、即時の悔恨が今でも胸の奥底につづくように留まったままである。

植皮などんでもないという私の怒りに対し、医師は平然と、先の女性患者の時と全く同じ言葉を発した。医師である義父に相談して今後を決める旨伝えると、娘の手術後の手当をしながら、彼はようやく私に目を向け、私の質素な普段着姿を眺め回してから、うつつとうしげに、いかなる医者か訊いてきた。

当時の記憶はなお鮮明である。義父が宮内庁病院顧問医師であることを聴くや否や、ついていた年輩の看護婦の顔がたちまちひきつり、青ざめ、医師はと言えば、問われもせぬのに、半ば突つ張り、メロメロと喋りだした。曰く、自分たち（K医科大学）の植皮技術は日本最高だ、例えば警察病院よりも優れている、宮内庁病院では植皮などできない……。手術中、医師は看護婦に写真を撮らせていた。学会発表や論文作成の似非資料にでもするつもりであつたらう。後日、私はその写真ネガを要求したが、撮影に失敗したとか、紛失したとか、

言い訳に終始し、ついに渡さず仕舞であった。

何がどうあれ、真皮まで切り除かれた娘の傷跡はもはや元には戻らない。当時癌研付属病院の医師であつた義兄（妻の兄）の紹介で、虎ノ門共済病院に急遽赴き、後に筑波大学に転任した医師の手厚い治療で事後処理をしたが、わが身に生じた事柄の何も分からないまま、手術中もその後のやりとりの間も、終始微笑んでいた三歳の幼子の顔が今でも胸に染みつき、私の生涯の負い目になつてゐる。

医療関係の友人によれば、報道される医療事故は氷山の一角であり、実態はむかしから特別に変化はないという。では何故、常変わらず悲惨な事故が続発するのか。思い起こし、銘肝せねばならぬ。昭和天皇が崩御される前、天皇の手術に当たつて、医師団は、輸血に備えて天皇の自己血を蓄え、弥が上にも慎重に事を運んだ。斯く、人に向かつて畏怖・畏敬の念あるところ、輸血ミス・手術事故など生まれるはずもないのである。

およそ人なるもの、その躰、その命、ひとしく畏敬されるべきものである。しかしながら、人身・人命を日常的に扱う中で、一部の医療従事者たちはいつか身命に対する畏敬の心を失い、弱き患者を意のままに扱うようになった。

さる著名な医学者は、ある時入院手術の患者となり、目覚めたときベットに固定され、尿道にカテーテルを挿入されているわが身を通して初めて患者の苦痛と立場、医療の現実を

悟ったという。が、患者尊重の医師としてつとに知られていた氏の認識がやつとこのあたりだったなら、それは悲しい。あとは推して知るべし、全ての医療従事者が全ての患者を人間存在として心から畏敬し医療事故がなくなる、恐らく、百年河清を俟つ夢物語ではなからうか。

そしてもし、この有様を打開する方策が、被害者たちが起こす医療訴訟以外にないとするならば、これまた悲しい。医療世界の果てしない猛省こそ求められる。

付記 なお娘のケース、医療訴訟を決断したが、ことを起こせば義兄が医学の世界に居られなくなるとの義母の必死の頼みで、断念した。が、娘の傷痕を見るにつけ、たくさんの医療事故被害者に思いを寄せるにつけ、今でもそれを悔やむ気持ちが消えやらない。

(二〇〇三年十一月)

学生授業評価

気の重いテーマが続き、次は軽やかなテーマを選んで物書き人生を楽しもうと思っていた矢先、挑戦的？な材料が飛び込んできた。そこで咄嗟に、本誌前号(『琅』16号)に書いた「学生授業評価」の続編とはなった。

非常勤講師で出向いた東京学芸大学から、私の「生徒指導の理論と方法」に対する「学生

授業評価」の第二弾が届いた。第一弾はいくつかの評価項目に対する個別的な五段階評定、今度は、私及びその講義に向けての自由記述コメントである。ある程度予想できてはいたものの、A4版一枚、一五七名中二名分のコメント、その最初から、脳天に一撃である。

「生徒指導の先生でありながら、最後の授業（このアンケートの結果を見たら、悪いことを書いていた生徒の成績を下げてしまうかもしれない）は自己を内省しない態度であり、大学教師として許せない態度である。……生徒を指導する態度を教える側でありながら自分自身の態度・発言は、授業内容と相反するものでした」（原文のまま）

！？アンケートは無記名だから、報復などできるはずもないが……？、これは何だと思う間もなく、次から次へと追い討ちがかかる。

レジユメのV字揭示など怠慢だ、印刷して配れ、やる気があるのか、二度と授業にくるな

ゴモゴモと何を言っているのかわからない。自慢話が多い

横暴。講義ではなく、自慢話と学生の悪口を言いに来ていた

あまりにワンマン、やる気も失せた。学生のこと考えろ、生徒指導教えるなら

私大生活で性格が悪くなったのか。来てやっているという態度。人選に注意

頼まれて仕方なく来てる、来年は来ないなど、やる気のない先生には教えてもらいたくない

斯く反発を受けるとは、さても一体、いかなる講義だったのか。

プロ野球・阪神タイガースが待望の優勝を果たした。その歓喜で大阪・道頓堀川に飛び込んだ直情者は何と五千名を越え、群衆が暴動化し、川縁の『かに道楽』の蟹看板が壊され、商店街は懼れ眼を覆い、けが人・死者も出るなど、警察の取り締まりも手を焼いた。一八年前、同様に阪神優勝の歓喜の中では、飛び込んだ者僅か三名、近辺商店街は群衆の喜びと共に祭り気分で賑わった。

ひと昔過ぎる間に、若者世代が大きく変わった。学校でいじめが普遍化し、児童生徒の内暴力・学級破壊は珍しいものではなくなり、昨今では成人式でも騒擾は当たり前、県知事や市長や大学教授の挨拶中断、講演中止などが相次いだ。こうした風潮の中で、大学もまた社会の縮図、とりわけ大教室では、居眠り・雑談・飲食・携帯電話等の無法・不条理の横行で、講義はままならず、教師の苛立ち・疲れは今、尋常ではない。

にもかかわらず、義理ある友人から頼まれ、貴重な一日のつぶれる辛さに耐えて半期授業一齣を応諾したのは、教員志望学生達の教職科目への熱意を期待し、特色あるわが持論を伝授せんとからの思いから。しかし、期待は初日初っぱなから、ものの美事に裏切られた。

教師が教壇に立つても、教室いっぱい二百近い学生諸君のざわめきは鎮まらない。「今日……お静かに」と言ってもなおまだざわめき、後向き声高に話し続ける者もいる。そこで

「静かに！」と一喝彼らを制し、「このようなこと言わざるを得ないのはまことに心苦しいが」と前置き、あらまし以下の如く語った。講義を円滑に行うための先制攻撃である。

「授業中の軽飲食は認める。居眠りも自由。但し、おしゃべり・雑談は絶対に不可。注意しても聞かない場合はつまみ出す。成人式でばか者どもが騒ぎ、県知事・市長・有識者たちの制止には応じないが、プロレスラーの一喝には恐れ入ったとか。かりにも教職志望者なら、それを他山の石とせよ。成績は4年生でも斟酌せず、試験の結果で厳格に行う」

不快感を丸出しにする者も少なくなかった。翌週には出席者数が一挙に二割がた減った。しかし私は、予告したように迷惑行為は断固許さず、時に叱咤し、退席を命じたりして、比較的静粛裡に全一三回の講義を終えた。そして最終日試験終了後、教師自ら用紙を配布・収集するのは、書きたいことも書けなくなり、教師もまた学生評価の結果に動揺して成績評価に影響を及ぼしかねないだろうことから、その旨説明し、その害を避けるために用紙収集、事務方への搬送を学生代表に委せて学生授業アンケートを行った。

社会機関たる学校は、もちろん、社会の規範や価値を教えるところである。それは時に、生徒の問題行動に即事的かつ強制的に対応することによって行われ、それだけに対象者に深刻なストレスやフラストレーション、敵意や攻撃心をもたらす。それを教師の内的権威や生徒指導関係等様々な要件や手だてによって乗り切るところに、生徒指導の本質がある。

この理を展開しながら、持論に沿って悪しき学生にはいわゆる「しつけ」を行う講義でもあった。が、一過性の非常勤講師の立場では、遺憾ながら、訓育的指導に反感しかつ試験不出来で成績評価不良を予測する一部学生には、ネガティブな感情を強烈に残したまま終わってしまった。冒頭の脳天一撃のコメントのように事実をねじ曲げたり、担任教師の支援で学校適応を取り戻した結果としての愚息の「アチーブメント（将棋学生名人、医学者）」を単なる自慢話に貶したり、「老体故の今年度限り」をやる気なしにすり替えるなど、彼らの授業評価のコメント内容に即してこと彼らに限って言うならば、反発を呼んだ私の訓育姿勢の明らかな失敗を示している。

しかし一方、よくよく視ると、授業評価コメント集には、いくつか肯定的コメントも同舟している。これは救いである。

先生は今年で終わりといい張っているけど、まだ来て欲しい。悪い先生とは思ってませんよ

先生の講義スタイルは嫌いじゃない。ぜひ、続けていってほしい

近頃本気で叱る教官が少ない。うるさい学生を叱ってくれた時は嬉しかった

推察するに、これらは皆、反発的な一部学生が何を記述するか予想した上で、教学関係者をも意識し、私を弁護しようとの明らかな意図をもって書かれている。その温情に心が晴れる。まして、

「大変素晴らしい、ためになる授業でした。先生のお話に毎回うなずかされることばかりでした。宗内先生は、学芸大へ来て講義するのは今年で最後とおっしゃってますが、ぜひ後輩のためにも、来年も学芸大で講義をお願いしたいです。学芸大としては、頭を下げてでも失ってはいけない人材だと思います」（原文のまま）

激しい罵声の後だけに、思わず知らず、教師冥利の泪が滲む（…）けっして自慢話には非ず！（）。一二名のコメント中、否定的コメント八、肯定的コメント八、そのほか要望五であった。

叱り、論じて善悪・正邪・倫理を教える。未だ未発達の子どもに対するこの教育の基本方程式による訓育が、悲しいかな、高等教育たる大学教育の現場でも、今最も求められている。その訓育を受けている最中の者が教育・指導を行う相手（教員）を冷静かつ客観的に評価するなど期待し得るはずもなく、その評価結果の内容・意味をよく知りよく生かすのは当該教員以外にはない。が、皮肉なことに、今この学生授業評価が教員間の相対的評価を行うための手段として、急速に取り入れられるようになってきた。

時の流れである。日立製作所・松下電器産業がすでに年功序列型賃金を廃止、このほどソニーが更に一歩進めて住宅・家族手当など諸手当を全廃していったその成果主義賃金に踏み込んだ。大学など教育界にも成果型賃金体系が持ち込まれるのもそれほど遠くはなく、

その折、教員評価の柱として研究業績と並ぶ教育業績の重要な項目として学生授業評価が取り上げられることは間違いない。

さりとてしかし、それは安易に実施し、安易に利用するなら、教育を根底から誤らせる基ともなる。例えば、学生に対しては教員攻撃の機運を助長しかえって反省の機会を奪い、教員においては学生からの評価点を上げるべく安逸な学生に妥協したり、管理体制側には熱意ある教員を排除するの愚を犯させたり等々。

学生授業評価については、昨今安易なる実施が目につく。内容・実施方法・結果の評価方法等々、真に教員評価の具たるべく、様々に検討・改善してゆかねばならないだろう。

(二〇〇三年十二月)

「臨床心理士」教・雑感

物事は、いったんブームとなると、恐ろしい。かつて「オウム真理教」がバブル時代に育った主体性なき若者たちを惹きつけて肥大化し、恐るべき反社会的集団に発展したが、昨今、私のいる心理学の世界では、ポスト・バブル期の行く先不安を抱える未成熟な若者たちを魅惑して異常な臨床心理学ブームが起こり、様々な物議を醸している。

それはまさに、「臨床心理士」教と呼ぶにふさわしい。受験生が減り続ける厳しい大学サバイバル時代に、臨床心理学系だけは受験生が増加の一途、学部・学科の増・新設も相次ぎ、

我が世の春を謳っている。このブームの火付け役が、文科省の懇篤な支援を受ける心理学界の一団体・心理臨床学会とその外郭団体たる財団法人臨床心理士資格認定協会、即ち、臨床心理士資格を取れば公立学校のスクールカウンセラー（以下、SCと略称）になれるとの看板が、癒し癒され時代を背景に受験生を殺到させているのである。協会はその勢いに乗り、臨床心理士資格を持つ専任教員を配置せねば臨床心理士資格を受験取得できる大学院とは認定しないとして協会所属の教員を送り込み、今や臨床心理学系学部・学科のほとんどを傘下に入れていた。そのようなことは起こり得るはずもないが、ある特定の医学団体に所属する教員がいなければ医師国家試験が受けられない医学部になってしまふという不条理にたえられない。教育カウンセリング界の権威・国分康孝氏はこの協会（並びに学会）の行動を早くから厳しく批判し続け、私もまたその犯罪的権力行為を全く認めがたいのではあるが……。

さて、SCは、文科省の定める資格基準に従い、各都道府県教育委員会によって選抜され、各学校に派遣されている。文科省は、このSCの資格を、財団法人日本臨床心理士資格認定協会が認定した臨床心理士、精神科医、大学の学長・教授などとしているが、実際には、臨床心理士がSC全体のほぼ九割を占めて独占的に採用されている。こうした状況の下、SCの資格を巡って、過日、日本カウンセリング学会、日本発達心理学会など独自に資格認定を行っている心理学関係十四団体が合同で文科省に要望書を提出した。SCに対する資格限定の根拠が不明で、各団体が認定する臨床心理士以外の資格取得者（発達心理士・認

定カウンセラー・学校心理士など)にもSCへの門戸を広げるべきだ、というものである。太いパイプをもって繋がり、「臨床心理士」教の礎を作った文科省が認定協会以外の団体にSC資格を認めるはずもないが、私はこの門戸開放意見にも賛同しない。何故なら、臨床心理士も含めて、心理関係資格者はどれも皆、生徒指導・教育臨床に関しては、いわゆる素人なのである。

ここで、心理資格の代表たる「臨床心理士」を例にとれば、それは指定の大学院修士課程を修了すれば認定協会の試験を経て与えられる。因みにこれを、医学部卒業者が医師免許国家試験に合格してからなお5年以上にも渡る然るべき分野別専門的臨床研修を経てようやく専門医(分野別認定医)の受験資格を得るのに較べてみれば、たやすく分かる。要するに「臨床心理士」なる資格は、臨床心理学の基礎的な知識と技能を学習したことを称するもので、例えば非行臨床、病院臨床、学校臨床などの専門家を唱え得るものではけつしてない。医は「仁術」とも言われ、それは深い専門性に基づいた人間味溢れる臨床経験の上によくやぐ培養されるものであるが、教育臨床の世界はさらにいつそうの「仁術」である。学校の教育経験もない者に(専門家として)SCが務まるとするは、およそ弁えぬ者たちの浅慮浅見である。

専門家たらざるSCを派遣されて、今学校では、生徒指導に関して尋常ならざる自信喪失と無気力が漂い始めている。上(教委)に向けてSCの効果有りと報告すべく心理的に強制される中で、「若年教師たちには指導困難なケースはSCに委ねてしまえばよいとする責

任転嫁や無責任な態度が生まれ、長年生徒指導に実績を積み重ねてきたベテラン教師たちには無力感と屈辱感が植えつけられ、専門職としての生徒指導力を錬磨する意欲が奪われつつあるのである。このことは、長く教員養成系大学にいて、またここ数年SCとして深く教育現場に立ち入ってきた私には、手に取るように伝わってくる。

学校を救おうとして始められたSC制度が、一つの学会・協会あるいは心理学関係学会の繁栄のみに利用され、むしろ危機状態を作り出す。この悪しき事態を放置するならば、不適応児によるいつその学校破壊など、由由しき結果がもたらされる。遅ればせながら、今こそ冷静かつ早急に、抜本的なSC制度の改善・構築を図って行かねばならないだろう。

最後に私見を披露してみる。

SCは現職教員の中から選抜する（但し、常勤職）。教育実践の格闘の中から一家をなした教育臨床の先達、例えば無着成恭や大西忠治らに勝るとも劣らぬ人材が教育界には陸続と生まれている。今や専門職となったSCに勇躍転じることと思われる。

心理関係有資格者は、三〇五年ほど学級副担任など現場経験を与えてから採用する。資質ある者なら、現実のさまざまな教育力学を学びとって、きつと医療認定医に匹敵する専門的・学校臨床心理士になると、期待される。

（二〇〇二年十一月）